

他者と共に学び合う授業の構築に関する提案：
教師連携を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007230

他者と共に学び合う授業の構築に関する提案

－教師連携を通して－

大 橋 陽 子

1. 問題の所在

(1) 現代社会に生きる子どもたちの現状

現代の日本社会は、技術革新、スピード化、ライフスタイル変化など様々な波が押し寄せ、家に居ながら欲しい物は簡単に手に入る便利な時代となった。しかし、コミュニケーションがうまく取れない、心を開放して話し合える家族や友人がいないなど、対人関係で抱えるストレスも大きい。このような時代の中で育つ子どもたちは、どのような思いで生きているのだろうか。

2010 年 1 月、東京江戸川区の小学校 1 年男児が両親から虐待されて死亡した事件を受けて、再発防止のために取り組んだ全国調査によると、「困ったことがあっても相談しない・相談先がない」と回答した子どもの割合は、全調査人数中 28.5%だったという。孤独を感じ、悩みを一人で抱え込んでいる子どもたちの現状が浮かび上がってきている。こうした現状を受け止め、これからの学校教育では、人とのつながりを回復していくことが最重要課題と考える。

(2) 求められる授業像

ヴィゴツキーは、高次な精神機能は、協同活動の中で発生するものであり、他者との相互作用を通して知識が構成されていくという社会構成主義の考え方を示している。

多田孝志は、対話を授業に位置づけることで「なるほど、こんな考え方もあったのか」と新たな世界を発見することにつながり、知の統合がなされるという。さらに、その過程で多様な人々と「かかわる」よさを実感でき、良好な人間関係が築かれるのだと述べている（多田、2009）。

つまり、人は、他者の考えとの比較により、自分になかった考えを関連付け、再構築することで知的に深い学びに達するのである。その過程において、自己理解や他者理解ができる。学校の授業においても、「他者と共に学び合う授業」を中核に据えていくことが、人とのつながりを回復し、子どもたちを救うことにつながると考える。

文部科学省は、2008 年告示の小学校学習指導要領「総則」において、「基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視する」とともに、「児童の言語活動を充実すること」の必要性を示している。そして、「言語」の役割として、「論理や思考」の道具としてだけでなく「コミュニケーションや豊かな感性」のための道具としても認識し、両面を目的として「言語活動の充実」を図っていくべきであると明確化している。新教育課程においても、言語による他者とのかかわりを通して思考や理解を深め、人間的なつながりを育む授業が求められている。

(3) 学校授業の現状

2009 年に発表されたベネッセ教育研究開発センター「学習指導基本調査報告書」によると、小・中学校とも 5 割以上の教師が理解度「中位」以上の児童・生徒を授業進行の目安にしており、理解度の低い児童・生徒が授業内容を理解する前に授業が進んでしまっている可能性が示唆されている。同じくベネッセ教育開発研究センターから、2009 年に発表された「子ども生活実態基本調査」によると、成績下位層の子どもたちの生活満足度が低い傾向が見られることがうかがえる。

つまり、授業内容が理解できず、自信のなさや不満を抱えながら学校生活を送る成績下位層の姿が浮き彫りになっているのである。

(4) 実習校の状況

2010年4月からI市立K小学校3年部に所属し、研究を進めた。3年部の児童は、各クラス約35名ずつ、4クラスで構成されている。K小学校の校内研修における研究テーマは、「授業の探求」であり、特徴的な研究方法は、窓口となる教科を設けず、一人ひとりが個人テーマと追究する教科領域を設定し、求める授業像と具体的な方策を明らかにして追究していることである。4月にそれぞれの教師が設定した個人テーマと方策を見ると、「ペアやグループといった少人数による交流の場を設定し、みんなで学び合う授業」を目指していきたいと考えている教師が多いことが分かった。これは、私が目指す「他者と共に学び合う授業」と合致するものだと言える。

2. 研究の目的と方法

筆者と同じ「他者と共に学び合う」授業像を目指す実習校において、学年教師と連携して取り組むことは、一人で取り組むよりも何倍もの効果を生み出し、学年の子どもたちの力となっていくに違いないと考えた。そこで、本研究の目的を「他者と共に学び合う授業を学年連携の中で構築する方法を明らかにする」と定め、大学院で学んだ認知科学の知見を取り入れながら、学年教師と協働的にかかわり、研究を進めていくことにした。

本研究の方法は、アクション・リサーチである。そこで、まず、子どもたちの実態や教師の思いを探る中で実習校の課題を明らかにし、そして、現場の教師と課題を共有しながら「他者と共に学び合う授業」について実践と省察を繰り返す中で改善活動を行っていくことにした。

3. 研究の内容

(1) 課題の明確化

実習校3年部において、子どもたちや教師がどのような思いで取り組んでいるのかを分析していく中で、次の2点が課題として浮かび上がってきた。

①「友達と相談したり教え合ったりしたくない子が34%」

～2010年5月 第3学年児童全員対象の「学習に関するアンケート調査」より

子どもたちへのアンケート調査から、他者との交流に否定的な思いを抱いている子がすべての子どもの3分の1以上という結果が明らかになった。否定の理由からは、「学習は他者と一緒に学びを深めていくものというより、自分だけの力で成立させるもの」という意識が強いことが分かった。また、「友達との関係性」や「自身の性格や能力」によって交流への意欲が失われている子も見られた。子どもたちが抱えているこうした交流への思いや不安を丹念に紐解き、「他者と共に学び合う授業」のよさや楽しさを実感させたいと考えた。そこには、同時に知的に深い学びと他者との人間的なつながりを育むことができると考えられるからである。

②「聞き比べることができない」～2010年6月 3年部学年会での教師の会話より

3年部教師の会話から「聞き比べることができない」という子どもたちの課題が明らかになった。「他者と共に学び合う授業」を構築するためには、聞き比べる視点を意識させることが必要である。「聞き比べる」ことは、思考の始まりであり、深い学びや他者理解につながるからである。

(2) 実践の全体像を描く

図1は、実践の全体像である。「他者と共に学び合う授業」を構築するために3年部の課題に着目し、相談や教え合いに対する否定的な思いを解きほぐすと同時に「聞き比べる」視点を子どもたちに意識させ、他者と学び合う授業のよさや楽しさを実感させたいと考えた。その実践研究は、2つの柱からなる。「子どもたちへのかかわり」では、「子どもたちへの指導・支援の計画を立案し、自身の授業実践を行う」ことをメインに取り組み、「教師とのかかわり」では、「3年部教師と連携しながら、共通意識のもとで子どもたちへの指導・支援を行う」ということを主軸に取り組んだ。

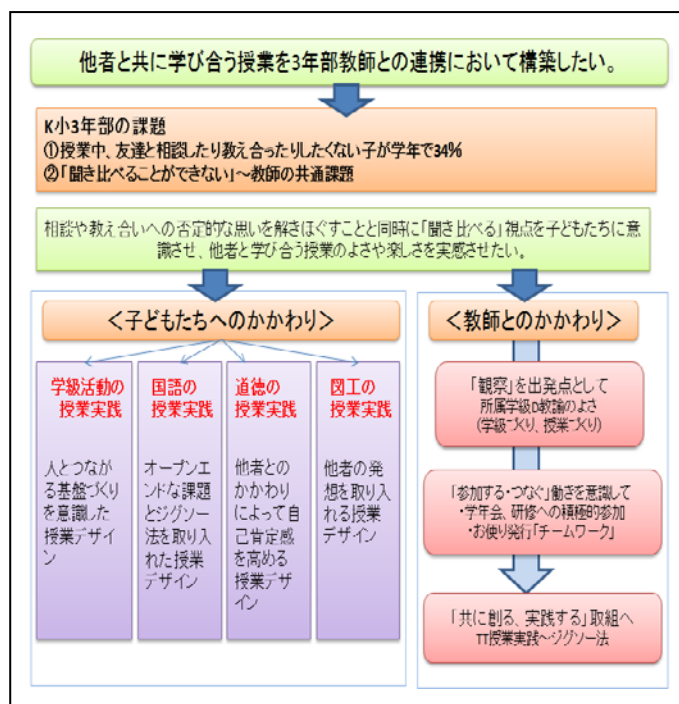


図1 実践の全体像

(3) 子どもたちへのかかわり

「子どもたちへのかかわり」では、以下の4つの授業をデザインし、授業実践を行った。

教科・実践名	授業のキーワードと授業構想
①「学活の授業実践」 ・「だるま暗号文を解こう」 ・「どんな見方ができるかな」 ・「みんなで一緒に勉強するために」	「人とつながる基盤づくりを意識した授業デザイン」 暗号文をグループで解いたり、だまし絵の色々な見え方を話し合ったりする中で、友達と相談し合うよさを子ども自身の実感できる展開を考えた。また、様々な聞き方を体験したりアンケート結果から友達の考えを知ったりすることで、自分自身の学習の仕方を振り返る場を設けた。
②「国語の授業実践」 ・「分類ということ」 (1単元)	「オープンエンドな課題とジグソー法を取り入れた授業デザイン」 「ねこの絵を見て自分なりの観点で分類をする」という多様な考えが出て友達の考えと比べることが楽しくなる課題を設定した。そして、ペアの友達に自分のやり方をクイズ形式で説明し合った後、自分もペアの友達も気付かない新たな分類方法を見つけてさらに交流に出かけ、見つけた情報をもとのペアに説明するというジグソー交流形式を仕組んだ。
③「道徳の授業実践」 ・「自分を見つめよう」	「他者とのかかわりによって自己肯定感を高める授業デザイン」 「他者交流によって自分では気付かない自分のよい所に気付く」という場面を「背中に伝えるメッセージ」という方法で仕組んだ。
④「図工の授業実践」 ・「グループで描こう リレーの木」	「他者の発想を取り入れる授業デザイン」 「学習は、他者と一緒に深めるものというより自分ひとりで力をつけていくものだ」と捉えていた子どもたちに「相手の考えを真似したり、取り入れたりしながら、自分の考えをよりよいものにしていく」という学習観を意識させたいと考えた。グループで描きたい「木」のイメージを話し合い、リレーしながら下書きを描き、色塗りをする展開を構想した。

これらの取組から、小グループにすることにより、どの子にも考える場を与えられること、全体では出しづらい疑問等も気軽に出し説明し合う中で納得して学習を進められるよさが生まれることが明らかになった。図工等の活動の場合、互いにモニタリングしながらそれぞれの視点で気付いたことを伝え合う様子も見られた。オープンエンドな課題は、友達の考えと比べる意欲を増すだけでなく、豊かな発想を生み出し、他者の考えとの比較から知的に深まっていくことが明らかになった。発想の乏しい子も、面白いと思った友達の考えを取り入れて学びを深めていく様子が見られた。他者交流は、知的に深まり、良好な人間関係を築くことにつながる。特にジグソー法は、目的意識、相手意識を明確にし、交流の必然性を生み出すことを見出した。

授業を参観した先生方との話から、学びのパターンは色々あり、様々な方法を経験させていくことが大事であると実感した。また、「子どもの思いと教師のねらいをすり合わせ、時間をかけたところで深められるよう、シンプルな中身の構成がよい」「学びの実感をもたせることが大切」「自然発生的に交流が起きてくるとよい」など、授業づくりの重要な視点を再確認した。

（４）教師とのかかわり

「教師とのかかわり」では、学級づくり・授業づくりの「観察」を通して、互いに尊重し合う学級づくりが重要であることや日常のあらゆる場面で「学習の構え」を育てる取組が必要であることが明らかになった。また、「参加する・つなぐ」働きを通して、3年部の研修サイクルのよさを洗い出し、共通認識を深める手立てとして図2のようなお便りを発行した。これにより、教師連携の形も実情に合わせて様々に変化できること、共通理解・共通支援のために紙面に残して情報を共有していくことも連携を支える手立ての一つになることを感じた。さらに、「共に創る・実践する」取組では、担任のA教諭と知識構築に向けたTT授業を実施する中で、教師がどのような視点をもつことで子どもたちの学びが深まっていくのかを考察することができた。

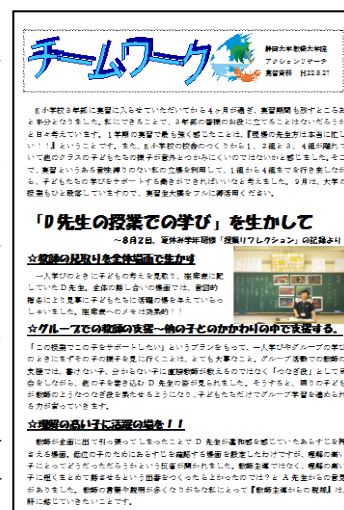


図2 お便り「チームワーク」

4. 研究の成果 ～子どもたちに見られた変容から

「子どもたちへのかかわり」と「教師とのかかわり」を通して、子どもたちは変容していった。

「子どもたちへのアンケート結果から」は、次の3つの点で変容を見ることができる。

- ①相談や教え合いについての意欲が格段に向上した。（5月の66%→12月には92%へ）
- ②子どもたち自身が「他者の考えと聞き比べる」意識をもてるようになった。

（5月の49%→12月の86%と37ポイントの上昇率）

- ③授業の中で相談したり教え合ったりする機会が保障されていると子どもたち自身が感じられるようになった。（5月の58%→12月には82%へ）

「3年部教師の認識から」は、「聞き比べる」ことについての子どもたちの変容を図3のように捉えることができた。そして、3年部教師が子どもたちの姿としてその成長を実感したことが、観察や協議により明らかになった。

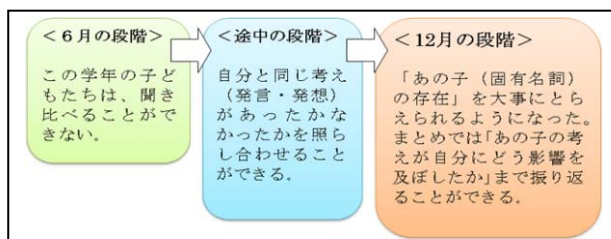


図3 聞き比べることについての子どもたちの変容

「個別に見る児童の変容から」は、抽出学級において、相談や教え合いに対して否定から肯定に意識が変容した子に着目し、変容の理由を探った。その結果、他者との考えの違いの交流から、知的に深まるよさや楽しさを実感して交流への意欲が高まっていく子が多いことを見出した。また、自分に引きつけて考えるための体験や友達の考えによって自分の学びがどう影響されたかを振り返る機会をもつことで相談や教え合いへの意欲が向上に向かう子も見られた。変容につながるきっかけは個によって違うため、色々なアプローチから様々な経験を与えることが重要である。

5. 研究のまとめ ～「他者と共に学び合う授業」を構築するための提案

全取組を通して得られた知見をもとに、「こういうことを学年連携のもとで話し合い、検討していくことは、他者と共に学び合う授業を構築する上で価値があるだろう」と思われる1つの方法として「話し合いの内容を中心とした全体像」及び「教師連携の形」を以下に提案する。

(1) 教師連携における「他者と共に学び合う授業」全体像

「他者と共に学び合う授業の構築」には、図4のように「互いに尊重し合う学級づくり」が基盤となる。その上で、学年教師が「自らを開き、語り、共に子どもたちを育てる」意識をもつことが要となる。連携は、初めから存在するものではなく、築いていくものである。担任が一人で取り組むより大きな効果を生むために、学年内の教師で話し合いたい内容として次の3点を挙げる。

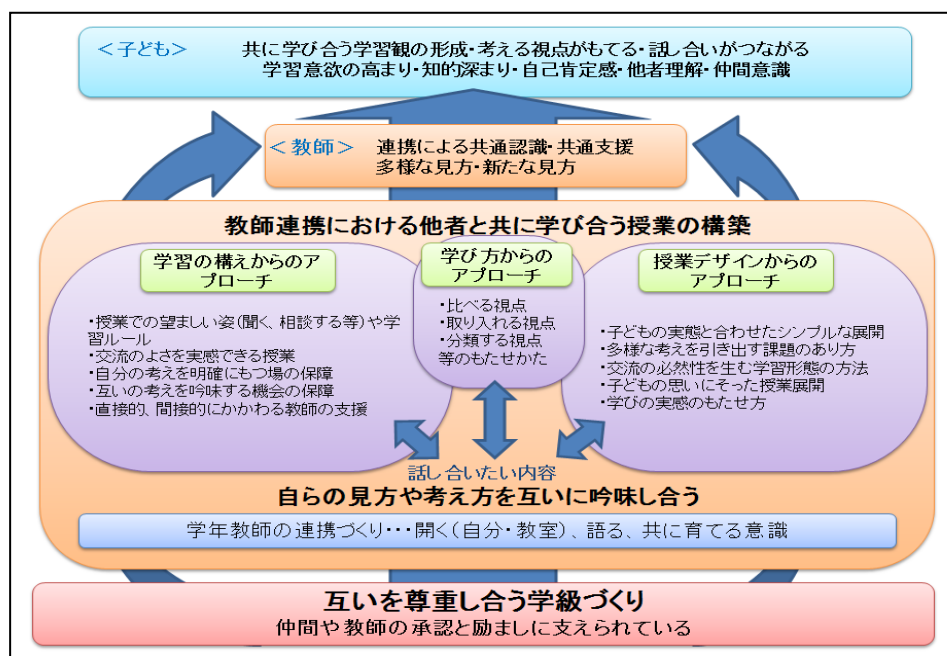


図4 「学年連携における他者と共に学び合う授業」全体像

- ①授業や日常生活などあらゆる場で指導可能な広い枠組みとして学ぶための支えとなる力を育てていく必要がある。ここでは、「学習の構えからのアプローチ」とし、子どもたちの実態からどういう姿をめざしていきたいか、そのために押さえない学習ルールや学習習慣等は何か、交流のよさを実感できる授業をどう仕組んだらよいか等を話し合いたい内容として掲げた。
- ②どの教科でも広く使えると思われる学び方の方法を子どもたちに意識させることは、大変重要なことである。ここでは、「学び方からのアプローチ」とし、特に「比べる視点・取り入れる視点・分類する視点等」のもたせかたを話し合いたい内容として掲げた。
- ③授業を構想する際、学習場面に応じて教師側が意識していくとよいものを「授業デザインからのアプローチ」として示した。「子どもの実態と合わせたシンプルな展開」「多様な考えを引き出

す課題のあり方」「交流の必然性を考えた学習形態の方法」「学びの実感のもたせ方」等、学年教師と話し合い、吟味していくとよいと思われる内容を掲げた。

こうした取組により、教師による共通認識や支援が可能になり、それぞれの教師が多様な見方や新たな視点をもてるようになる。また、子どもたちには、共に学び合う学習観の形成、知的深まりや学習意欲の高まり、自己肯定感や他者理解、仲間意識といった精神的成長も期待できる。

(2) 学びを深める教師連携サイクル

図5は、本研究で3年部教師と連携して取り組んできたことを、授業研究における短期の教師連携サイクルとして提案するものである。通常のK小学校研究スタイル(①②③)に加え、「A 学年部独自の取組」として他教諭による先行授業や他学級での試行授業を重ね、問題点を把握し、修正、再計画を繰り返したり、「B お便り」のように一連の授業づくりを通して学んだことを紙面に残し共有化を図ったりすることも連携の1つの形として考えられる。

図6は、学年の子どもの育成における長期の教師連携サイクルとしての提案である。学校の実情に合わせて使い分けができるよう「是非、取り入れたいものⅠ-1、2、3(水色部分)」「取り入れたいと考えるものⅠ及びⅡ-1、2(水色部分+オレンジ部分+赤色部分)」「可能ならば取り入れたいと考えるものⅠ、Ⅱ及びⅢ-1、2(水色部分+オレンジ部分+赤色部分+黄緑色部分)」の3段階にまとめた。

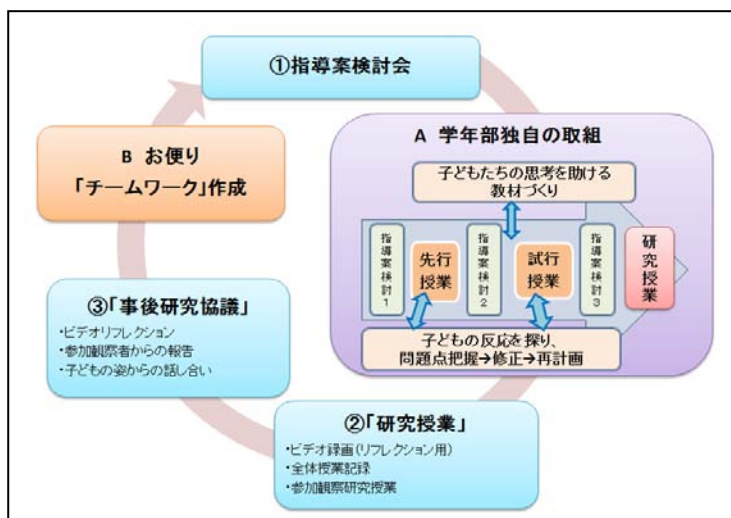


図5 「授業研究における短期の教師連携サイクル」

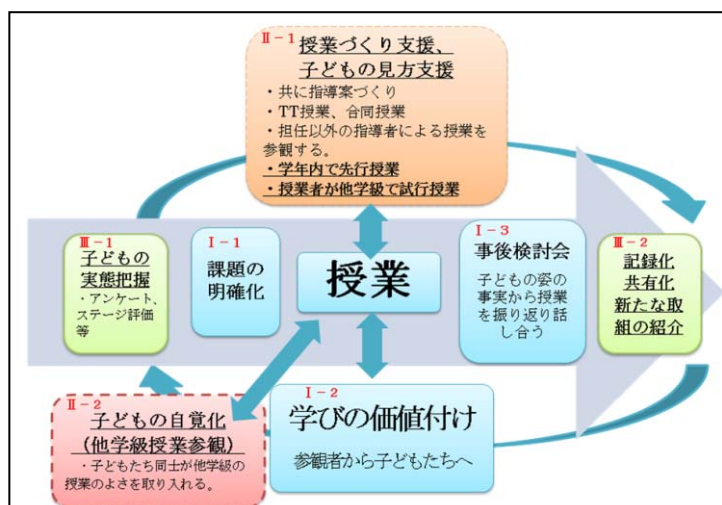


図6 「学年の子どもの育成における長期の教師連携サイクル」

6. おわりに

佐藤学は、「学ぶ」ということは、「交わりながら学ぶ」ことだと述べている。授業においては、人の考えは自分と違うことに気付き、その中で人の考えと寄り添ったり、話し合ったりしながら新しい考えや見方を築いていくことを大切にしていきたい。本研究では、筆者自身にできる働きを考え、取り組んできたが、先生方との話し合いにより、授業づくりや教師連携の在り方を学んだだけではなく、新しい見方や多面的な考え方を身に付け、豊かに物事を捉えられるようになってきたことを実感している。「他者との感じ方・考え方の違いを生かして学ぶ」ことは、授業づくりにも教師連携にも生かせることである。今後、相互交流の場を教師が仕組む段階から、子どもたちが自発的に相互交流を行い、互いに知的に深まっていく方法を探っていきたいと考えている。